

カーナビを不便にしてみたら

京都先端科学大学

川上 浩司

不利益、つまり「不便だからこそ得られる益」があるという話の連載をしています。「そんな益なんかあるものか」とか「不便な昔の道具が懐かしいね」などと返されることがあるので、不利益をユーザーに与えるプロダクトやサービスを新たにデザインしています。それを見せれば、不利益はある、昔に戻る必要はない、ということを得てもらえます。

そのようなデザイン案の中から、先月は京都大学の生協で売り出した「素数ものさし」を紹介しました。メモリが素数の

ところにしかなく、メモリのない長さの線を正確に引こうとするとちょっと工夫が必要になります。普通のものさしより不便なのですが、線を引くという単純作業にちょっとしたバズル性が加わります。どんな工夫をして線を引こうかなと、ちょっと頭を使います。そして答えを見つけると、ちょっと嬉しくなります。

今月紹介したいのは、「かすれるナビ」です。車を走らせると、走った経路がナビの上で少し掠れて見えにくくなるのです。どうです、不便でしょう。でも、

ちょっと面白そうだと思いますか？面白そうだと思うのは、見えにくくなるという不便から何かの益が得られそうだと直感したからです。

かすれるナビは、GoogleマップのAPIを使って、アンドロイドのアプリとして実装しました。スマホにGoogleマップを表示しながら移動すると、通った道が少し掠れます。同じところを3回も通ると、その場所は地図上では真っ白になります。掠れる幅は、移動スピードによって変化します。早く動いているときは細く掠れ、ゆっくり動いているときは太く掠れて道幅を越えることもあります。

掠れる機能がついているか否か、それだけが違う2種類のアプリを作り、実験してみました。今こそスマホを車の運転席の前に立てて地図アプリをカーナ



ナビ代わりに使う人が増えましたが、実験した当時はそのような時代ではありませんでした。また、もしカーナビとして使って事故でも起こされたら面倒なことになりそうです。そこで、かすれるナビを歩行者用にして、京都の街歩き観光に来た人に使ってもらいました。

スマホにGPSが標準装備されるようになるより以前のことです。ですから、実験に参加していただいた皆様には、スマホだけでなく外付けのGPSも持ち歩

いてもらいました。ゴメンなさい。ゴメンなさいついでに、一日の街歩き観光が終わったらテストしてもらいました。街歩きで通った経路の上の風景と、そうでないダミーの風景の写真を見せ、「この風景を覚えていますか？」という質問をしたのです。

結果として、経路上の風景を「ハイ」、ダミーの風景を「イイエ」と正しく答え率を計算すると、掠れる機能付きの地図を使った人たちが有意に高かったのです。これは、どういうことでしょうか？

この実験結果は、私の仮説を支持しています。いつでも簡単に正確な情報が得られるという便利は、私たちの深層心理に対して「その情報をあなたが覚えておく必要はないですよ」とささやく、というのが私の仮説です。逆に、情報が失わ

そういえば、旧制高校の時代には英語の辞書を食べる人がいたという話を聞いて、とても共感し、自分でもやってみようと考えたことがありました（思いとどまりましたが）。まだ辞書がとても高価だった時代に、裏表2ページの英単語を暗記したら、そのページを破って食べてしまうのだそうです。これは、そこに書かれている単語が自分の外（辞書の「上」から自分の内（記憶）に移ったことを模擬的に表す儀式のようにも捉えられます。

ただし、それだけではないだろうと、先ほどのかすれるナビの実験結果が言っています。食べてしまうということは、情報がなくなってしまうということですが、そうすると、深層心理が、忘れることがないように英単語とその説明内容をしっかりと記憶に定着させます。「いつで

れてゆく状況になると、私たちの深層心理が「その情報は覚えておかねば」と思うのです。つまり情報が失われる（掠れる）という不便からは、自分の外（ナビの上）にある情報を自分の内（記憶）に移してしまうという益が得られる、といえそうです。

手軽に便利に入手できる情報は記憶されないという状況は、ちよくちよく見られます。私など、仕事場の机の上にあるパソコンに時計が表示されているので、「今、何時だっけ」と時計を見て時間を確認しても、数秒後に忘れます。視線をパソコンのモニターの上に移すだけで簡単に入手できる情報ですから。



も簡単にと便利」の逆側にある不便には、深層心理に働く「益」があります。

近頃は英単語の意味など、ウェブ検索すれば出てきますし、スマホを携帯している人なら、それがいつでもどこでも簡単にできてしまいます。そうすると、一度意味を調べても、すぐに忘れて、また検索すればいいや、という沼に、いつの間にはハマっている人がいそうです。この沼から這い出すには、どうしたらよいでしょう？ 這い出さなくてもいいや、という判断もあるかもしれませんが、不利益的にはその判断はお勧めできません。

川上浩司（かわかみひろし）

一九六四年生まれ。京都大学工学部、同工学研究科修了。京都大学助教授・特定教授などを経て京都先端科学大学工学部教授。不利益の研究で学会論文賞・出版賞多数。著書に『不利益という発想』（二〇一七）など多数。